



現代人は科学技術と引き換えに何を失ってしまったのか。大自然の脅威に為す術なく呆然と立ち尽くすだけか。抗うのでなく、目を見開き、無心になり、耳を澄ましてみよ。

君に地震は聞こえたか。

第6巻第10号
通巻第70号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

お問い合わせ E-mail colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 二面 建築面) 幼稚園庭庭改修計画頭挫
- 四面 からすライブラリー) CD 『XIV / Home』
- 本 『日陰の庭のシェードガーデンニング』
- アート 坂東博展覧会『
- 六面 (ロンドン・レポート) 家の中で
- 七面 (語面) フレッシュメンシャル・ディベート

異常気象と呼ぶべきか。いや、もはや、これは天変地異と呼んでもよいようなところまでやってきているのではないか。肩書きはともかくとして、日本の自然はどうにかしてしまつたようである。例えば、この現象と向き合ったときに、神が怒っているのだ、とか、より大きな災厄の前触れであるに違いない、などと考えたり語ったりする人だっているだろう。無闇に人心の不安を煽るような言動は如何がなものか、という問題は切置として、そのように感じる人がいてもおかしくないほど、自然界の何かが明らかにおかしい、とは言えよう。その一方で、これだけ異常な出来事が続いたのだから、今後暫くは大きな災害なぞなく、静かな日々が期待できるんじゃないかな、という具合にのんびりとかまえる人もいるだろう。

それそれを、単に悲観、楽観と切り捨てることは簡単だが、そもそも、人というものは、程度の差こそあれ、楽観と悲観の間を往左往しながら生きるものである。斯く言う私も例外ではないが、それはまた別の機会にでも。

悲観も楽観も、その元にあるのは、ヒトが非在のものを想像したり、記憶したりできる能力を持つことに起因するのだろう。今を過

去や未来と比較したり、自分を他者と比較したり、現実の自分を空想上の自分と比較したり。つまり、これはある種の贅沢病とでも呼べるかもしれない。そんな想像能力がありがたきものだという仮定での話ではあるけれど。

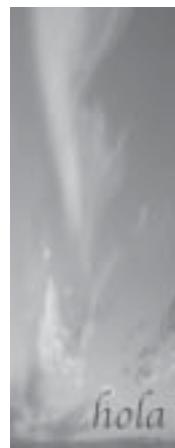
例えば、想像力がなければ、我々にできることは眼前の、今この瞬間の事柄や現実に対峙することばかりなわけであり、日本の未来を憂えたりする必要などないし、宝籤を神棚や仏壇に供えて三億円の期待にわくわくと胸震わせるようなこともない。自殺するのは人間の特権なのか、人間だけの不幸なのか。兎にも角にも、そんなことさえ、想像力の齎すものだということは確かだろう。

想像力という、恐らくは、人間だけに与えられたもの。この能力は、人間の生活の喜びの多くを成立させるために不可欠なありがたみものであるが、その一方で、病んだ頭脳を持つ人の手にかかる、とんだ災いの元ともなる。例えば、存在しない生物・化学兵器を存在するものとして空爆をしかける数大統領、爆弾や銃撃でどれだけ多くの人が死んでいようと戦闘行為などないと言いつける数の

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



以前、紙上で紹介した、幼稚園の園庭改修計画が頓挫することになった。計画自体が中止になったのではなく、私たちが提出した案は採用されないことになったのだ。理事会の決定である。

私たちの計画は、大型の遊具を買い求め設置するという、一般的な幼稚園の園庭のつくりかたとは違うものである。子どもは、遊びを発明し発見するものだから、なるべく単純でプリミティブな、遊びのきっかけを与えたいと思っただ。かたちの決まった遊びを与えるのではなく、子どもたちの可能性に期待して、光や色、手触りや匂いなど、かたちになる前の感覚の素粒子を散りばめたかった。未分化な環境が、自由な発想に働きかけて、彼らのなかに何か新たなものをつくり出すことを期待した。

原っぱや、川岸の崖にある洞穴や、林や草の茂みのほうが、遊び場にしたらえられたぶんこや、すべり台よりも魅力的なのだ。子どもたちには、わからない世界を探検することのほうが豊かな遊びなのではないか。すでにでき上がった考え方や、つくりあげられたかたちのあるものから、どれだけ創造的なものが生まれるのだろうか。

小さい時に、彼が紙粘土でつくった、像は、かたちもバランスよく、生命を感じる勢いがあり、相当により作品だと、いまだに私は思っている。彼は、よく楽しそうに造ったり描いたりしていた。周囲には、本物を知るのが多かったが、皆、彼の色やかたちを好きだった。ある時、彼は、大きく伸びゆく樹を描いたのだが、こともあろうに園上の先生は、その絵をとても稚拙でへたなものと言ったといふ。確かにうまく描いてはなかったかもしれないが、もっと

大切な何かが内包された絵だった。それなのに、少なからず専門家であるはずの先生が、それをわかることはなかったのだ。彼は、その日を境に、創作活動に対して完全に臆病になってしまった。もしこんなことがなくても、大きく実ったかどうかはわからない彼の才能かもしれないが、少なくとも、彼の可能性と創造の喜びは、いとも簡単に奪い取られてしまったのだ。

アンネフランクの物語について、あなたがもしその時代に生きていたらどうしていたか、という問いに対して、ひとりの少女が、善悪の判断は別として、自分も迫害を行ったのではないかと思う、と答えたといふ。これを聞いて、質問をした先生は烈火のごとく怒り、非人道的な許し難い考えと、少女の人格さえも否定したとしたら、一生懸命考えるという、誠実な行為を経て導き出した答えに対し、あたかも壕の向こうから手榴弾が投込まれたかのように、突然予想だにしない反応が返ってくるのだ。その少女は、何もわからずただおろおろするだけだろう。いったい迫害者は誰なのか。

ひとつの常識的な考えを押し付けることは、本来、広く、深く発展するはずの議論や思考を放棄してしまうばかりか、ひとの心に深い傷を負わせることさえある。

ものの常識から逃れること。少なくとも疑ってみること。これが計画のもつ、本来の意味である。

例えば、遊びをひとつひとつの身体の動きや、精神の動きに分解してみる。走る、登る、立つ、飛ぶ、跳ねる、腹はう、何かの下に潜る。遊びの相手による変化にも注目するといふ。子どもどうしが遊ぶのか、先生と一緒に遊ぶのか。あるいは、相手は、土とか水、木々といふ自然かもしれない。手触りや質感、反射したり透過したりする光、影のつくるコントラスト、暖かさ、涼しさ、砂のずれる音、葉のこすれる音、..。

場所をつくる要素をひとつひとつ丁寧に、手間

を惜まずに、注意深く再構成することが求められる。友人である理事や、もと大手建設会社にいた年長のかたの強い推薦があったと聞くが、どのような理由をもととも、結局は、計画案の説得力が足りなかったことに尽きる。設計者として全く恥じるものである。案を強く押しつけてくれた

人びとや、コラボレーションの計画を引受けてくれた遠く住む彫刻家、その段取りをしてくれた人びとに申し訳なく思ふ。中止となったデザインと計画には一般性があると信じるので、どこかできっと実現させたものである。

(篠崎健一)





ヤンヒポの 灰色の人生

あいたたたた。やっぱりアイツだったぜ。正しく、横断歩道で立ってたキャツだった。どこをどうひっくり返せば容姿端麗なのか・・・。責任者出てこい。

まあ、所詮、出会い系なんてもんは、こんなものなんですな。インターネットというバーチャルな空間で繰り広げられる男女のせめぎ合いでは、主観はほとんど役に立たず、また、自分自身の立ち位置を自分で勝手に作り上げて決定出来るという利点と、リスクが表裏一体な訳だから、その上で巡り合った相手が前振りの主観の部分で食い違っている、それに乗った自分自身を呪うしかないわけで、・・・。御託は兎も角、話が全然ちがう。やっぱり、責任者出てこい。

横断歩道と一緒に、連れも登場した。こちらは、どちらかという少し大柄で、各部位の作りが大味というか、バタ臭いというか、一言で形容するなら、こいつ、オカマだったら美人なんだけども、こいつ、横断歩道は留学経験を活かし、外資系の広報を渡り歩いているとの事。大味な方は、某独の自動車メーカー専門の修理会社に努めるO.T.との事。所有している車は当然、某独の高級車だって話し。

当然ながらセイちゃんも同様の感想を持ったようだ。しかしこうなると、これほど辛い合コンはないのである。スキー場で華麗に滑るうら若き女性に意を決して声をかけたら、快くコーグルを外したその下に還暦を過ぎてそうな老婆が出てきた事や、学級に最低一人以上は存在する、こいつからだけにはバレンタインのチョコをもらいたく無いと思ってたヤツから、2月14日の夕方電話がかかってきちゃったりした

時の事、さらには、容姿はイケイケ風で声をかけたのはいいが、いざ真剣にデートしてみてもIQがサル以下だった時の事等を想像してみたい。人生で寝ている時間は無駄にしているという考え方があがるが、これは、それにははるかお呼びも付かない程時間の浪費に思えてくる。一種の拷問に近い感覚だろう。えてして、そういう状況の場合、相手は大変盛り上がるものだ。そらそうだろう。手前みそがもしれないが、我々は、夜の六本木でも決して見劣りしないような普段から鍛錬を積んでいる。もちろん、人間は見た目より中身ではあるが、外見も磨くに越した事はない。特にこいつの場合は容姿の部分にウエイトが置かれる事が多い。そういう意味では、相手に「瓢箪から駒」という感情がありありと読み取れるのだ。それがまた、拷問に拍車をかける。「怒り心頭に達する」という言葉があるが、この場合は、血の気が心頭から引いていく様が生で味わえるのだ。

全員席に付くと同時に、元々決まっているコース料理が次々と運ばれてくる。こつなつたら、飯を喰う事に専念しようと思つようになる。運ばれてきた料理をサッとするのは当然ヤンヒポの仕事。普段から修業を積んでいるから、片手でスプーンとフォークを自在に操り、人分の皿に取り分ける。本来ならこれで相手の気を引く戦法だが、こつなつと、とつと飯を片付けて解散へ持つて行くこととする作戦に切り替わっている。さらには、皿ごと口に入れてしまつてはならないかというぐらいの勢いで料理を口に押し込み、バリバリ食べてしまふ。行儀も何も有ったもんじゃなし。無論、味の善し悪しが解るほどの余裕は全くない。口に食べ物が入っていれば、余計な会話もなくて済むってものだし・・・。しかし、そんな素行が、またワイルドだつて言われ、プラスというか、本質的にはマイナスに作用したりもする。

そんな過酷な状況の中、本人達から聞き出したのは二つだけ、名前と職業。それ以外の事は

一切聞く耳を持たなかった。普通なら、お互いが気に入れば、電場番号の交換となるはずだが、当然のことく、最後に「さよなら」を言つて別れるまで、名前と職業以外の話しを持ち出す通りはない。折角決めたブロックサインもまったく役に立たない。なぜなら、最初の1分でブロックサインを超越してしまつたからに他ならない。

つらいとは言え、いつかは時間も経つもので、食事も終わり解散の雰囲気が出てきた。相手の顔には二次会の開催を強く希望していると、人相鑑定人でなくても解る程はつきり現れている。当然、セイちゃんもはつきり感じ取っている、アイコンタクトだけですべき事を理解出来ている。

兎にも角にも、一次会場を出る事にする。支払いは事前に終わっている、ノーチエック。店の前で男女4人が微妙な空気の中、世間話に花を咲かせる事になる。相手も進んで二次会に行きたいと言いつた。この辺りは、臺の立った女性の性だ。逆に、言わせないようになっている事も事実だし。もちろん、我々男性陣からの誘いは待っているのだが、そこをいかいくくり放免される為の一手、それはあなた達は、結構、何度か利用してらんだ、このシステムを？僕は初めてだったんですけど・・・。当然、連中は初めてではないので、ぐつ音も出ない顔をしていましたとき、ちゃんちゃん。



からす新聞社共催

ライブ

あさがやんず
じょじ伊東
何だっけバンド(予定)
その他60年のりのヒッピー
風みたいなやつなど



11/26 Fri.

8:00pm

あさがやドラム

日陰の庭のシェードガーデニング

奥 峰子著

文化出版局 ISBN4-579-20580-4

Books

からす
L's L's



私の家の庭に日が射すのは、だいたい朝から午前中一杯。それも大きな桜と柿の枝を通して、木漏れ日となって降り注ぐので、影の部分の方が多いかも知れない。私が子どものころ、庭の西側をつぶして平屋を建て増してからのことだ。

大人になって、花を育てるのが好きになったが、さんと日の入るよその庭がいつも羨ましかった。ヒマワリはこの庭では育たない。育ったとしても、ひよろひよろの茎が伸びて、花をつける前に力つきてしまふ。悪くすると、芽も出ない。その他、季節の花屋の正面を彩るたいていの花も、上手く咲かせて長持ちさせるためには、鉢植えにしてお日さまを追いかけて移動させるしかない。

だから、庭に自生しているのは、昔からあるツツジやツゲ、サンショウやシロクチャといった、何となく地味な植物が多い。足もとに生えるのも、リュウノヒゲとかオモト、ギボウシなどはかりだった。

昔、海の近くの祖母の家の庭が、とても日当たりのいい広い庭で、祖母の手によってさまざまな花が咲き乱れ、小鳥や虫がたくさんいた。小さいころそこでたくさん遊んだ私は、草花が自由に咲き乱れる雑然とし

た庭を夢見るようになった。

だから、しばらくの間、自宅の庭にあまり愛着が持てずにいたのだが、あるときこの本を読んでから、すっかり意識が変わってしまった。

まず、一口に「日陰」と言っても、さまざまな日陰があるということ。一日中日陰の場所と、一日のうち半日が日陰になる場所、それから、木の下などでいつも何かに覆われていて、普通の半分くらいしか光が入らない「明るい日影」。それから、その陰が、東西南北どちら向きにできるか、季節によってはどうか・・・。

日陰、という言葉には、どうも草花にとつて不利なイメージがある。でも、陰がなかったらどうなるか？ エビネやギボウシなど、直射日光に弱い植物は枯れてしまふ。そう、日陰が好きなものたちもたくさんいるのだ。日陰だからこそ、そこにあった草花を育てればいいのだという当たり前のことを、この本は教えてくれた。著者の、木や草花に対する愛情が、穏やかな文章からも伝わって来て気持ちがいい。載っている絵や写真も、いかにも人為的に作つた庭ではなく、自然に生えている感じが主なものと思う。

元々、イギリスなど園芸に歴史があるところでは、シェードガーデニングというのはごく普通のことらしいが、どうやら、日本の「日陰」はイギリスのそれよりもじめじめして暗いらしい。でも、そんな日本の庭でも、その場所を良く知ること、咲かせることのできる美しい花はたくさんある。大きくなるものは、アジサイやジンチョウゲなどもそう。また、花は咲かなくても、葉っぱの色や形やデザインを楽しむこともできる。斑入りや縁取りなど、種類がたくさんあるアイビーや、きれいな赤い色になるコリウス、ユキノシタなど・・・。

私は、庭には草花が自分で生えていてほしい。つまり、なるべく、季節ごとにわざわざ花を買ってきて植えたりしなくても、春になれば自然に芽を出し、増えたり伸びたりしながら花をつける。その営みができるだけ順調にくり返されるお手伝いをするのが、人の仕事のような気がする。野山や道端で偶然花をみつけてはつとるように、自分の庭でも、季節ごとに

そんな喜びを持てたらなあと思つた。

それから私はちよくちよくあちこちの園芸店にできては、日陰が好きな植物を探すようになった。知識が少しでも増えるのは楽しいものだ。今まで何となく暗いとしが思えていなかった、リュウノヒゲやオモトも、その姿が妙に愛おしく映るようになってしまった。

今、育てているのは、クリスマススローズ。これは種類がたくさんあるが、花は地味なものが多い。でも、冬から早春にかけて、彩りの少ない庭で、そこだけ日だまりのように咲いている姿はとてすてきだ。成長がとてゆっくりなので、何年もかけて増えてくれることを祈りながら、桜の根元に、毎年少しづつ新しい種類を植えている。

スノードロップは真つ先に春を知らせてくれる。それから春にいっぱい増えるスミシ。エビネやユリもちゃんと毎年咲いてくれる。変わったところでは、ハート型の花をつけるケマンソウ(タイツリソウ)がおもしろい。家の庭ではどうしても育たないものもあった。土が合わないのか肥料不足か。もう少し勉強して、手厚く世話してあげればよかった。

柿の木の下には、明るい斑入りのアイビーを植えた。赤い実をつけるマンリョウは、小鳥の落とし物から生えてきた贈り物。

こうして、目立たないけれど健気な庭のなかまたちと知りあふことで、私の毎日もしづつ豊かになった気がする。自分がないものを望むのではなく、時には身の回りをよく見て「らん、ということかも知れない。とてもありがたいことだと思つた。

一つ残念なのは、最近留守中に家族が入れた植木屋さんに、足もとの植物が短く切られてしまったこと！冬のアイビーは貴重な緑だし、石に登って紅葉するのだった。ああ残念無念。あとはまた暖かい季節が来て、新しく伸びてくれることを祈るばかりだ。

少し行き詰まると、私はよく植物の本を開く。図鑑もいろいろ。たまにはガーデニングの本もいろいろか。

(長井理佳)

『XIV / Home』

Cooking Vinyl

2000年、CD 197



CDs

純粋に音楽が好きで音楽を創り続けている人々が増えてきているような気がしないかな。いや、そういう人々がデジタル技術やネットワークの進歩のおかげで、遠く離れたところまで何かを伝えられるようになったのだ、というのが実体か。

いずれにせよ、豪華な玉手箱ではなく、ささやかな手作りの玩具箱を開けたような、そんな素敵な出会いがまたひとつ。

ポップだったり、ノイジーだったり。ノスタルジックだったり、現代的だったり。好きな音を好きなように紡ぐ。箱庭的な、限界のある多様さがここにある。確かなのは、彼らもぼくも、音楽が大好きだったことだ。

(全木)



Art



ばんどうまさる

板東優展覧会

銀座 ギャラリー上田

11月8日(月) - 27(土)

セロリだと言った人がいました。夢の中に出てくるかわいい生き物のようだと言った人もいました。抽象でも具体でもない、自然に、捻りつまみだされたかたちは、あたりに漂う空気が、彼の手を通して凝固したような、不可思議な爽やかさと深さをもっている。あるときは、聖人や聖母のように、仏のように、そこにいる人を安らかな気持ちにさせてくれる。タイトルのAnimaとは、風とか空気、呼吸、そして心や精神、魂までを指し示す。

坂東優 1952年北海道帯広生まれ、エル・グレコに師事、現在ニューヨーク在住
帯広市に作品多数

家の中で



その日は朝から雨模様な空だった。何となく湿気を肌を感じるようで肌寒い。そう言えば僕には、雨が降っていたり風が強かったり、表が寒い時などに「家があるっていいなあ」と改めて感謝する癖がある。そんな状況下で初めて、屋根があり壁があり、僕を外の厳しい気候から守ってくれる家という空間に気が付き、ありがたいと思えるのだ。それは建物であればすべて含まれてしまうのだが、やはり自分がかつるげるプライベートの空間としての、家のその存在は他の建物に比べるとひとときと大きい。何となく一昔前のマイホーム・ブームを思い出す。あの時はあたかも人生の目標がすべて「家」という一つの建物、物質に凝縮され、いかにも象徴的になっている風潮がひどくつまらないものに、住む場所に対してのいつさの責任がない立場から感じていたが、今となってはあの時大人たちが意味していた「マイホーム」の意味が前よりも少しは分かるような気がする。物質主義的なその言葉の響きには、やっぱり喜らしがあり、そこに収まるだろう人間関係や個人の足取り、歴史までもが含まれているような気がするのだ。マイホームに辿り着くその道のりには必ず、自分が生まれた時に用意されていた場所を出るといふ作業が発生し、そこに仕事の都合、結婚、家族、お金などの様々な要素が積み重なり、家はただの箱ではなくなるのだらう。僕が覚えているあの家を手に入れた時、両親はどんな気持ちだったのだろうか？

建物に詰まる色々なものに従って、もう一つ「家」を感じる瞬間がある。たとえば玄関を開け

ると夕食の匂いがしたり、家に帰り、たいたいまゝと声をかけても返事がないので誰もいないことに気が付いたり、「家」という物を思い浮かべるとき、僕はそのイメージは自らのマイホームにたどり着いた人のそれとはだいぶ違うながらも、やはり家族という概念と深く結びついている。「家」を意識するもう一つの瞬間。その思いとは逆に、独りで家の中にいる時にこそ僕は、家の存在を感じるのだ。「お留守番」という言葉の響きはどのような印象を与えるのだろうか？僕と同じような印象を持ち、その気持ちが分かる人もいるかもしれない。独りでぼつんと家の中にいると、妙に辺りが静かに感じてまるで世界中に自分だけ取り残されたような気までする時もある。そんな不安な状態から、改めて家によって守られていることを自覚するのである。そしてそれは、堂々巡りにもなりかねないのだが、「家」という家族と深く結びついたものを強く認識することによってまた、家族または、場所を居場所とたらしめる人間関係までも強く感じるのである。付け加えるならば僕は、母親が洗濯をしたり料理をしたりと、家事をしているその傍らで、本を読んだり宿題をしたりするのが好きだったのだ。それと同じ事が天気の良い日にも起こりえる。そうやって僕は、北風が強い日などに暖かい部屋の中で、たとえそれが一人暮らしのアパートだとしても、家に守られていることを感じ、同時にそんな人間の繋がりのような暖かさも感じているのだ。思い出であつたり、これからの事であつたり。

結局、外は雨が降り出していた。やっぱり今日は寒いな、と思ったと同時にセントラルヒーティングのタイマーが「カチン」と音を立てて、暖房がついた。僕は家の中に一人。少しずつ部屋の中が暖まってくるのを感じる。雨音がどこことなく心地よい。これからお茶を入れよう。少し、本でも読もうかと思つ。

(神山)

ストーカー バスター



produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

4-3-49-1 Narita-Higashi Suginami-ku

Tokyo Japan Zip:166-0015

voice : +81-3-5347-9063

facsimile : +81-3-5347-9064

相談無料
秘密厳守

プレジデンシャル・ディベート

間近に迫ったアメリカ大統領選挙。強い影響力を持つとも言われる候補者同士の討論会(3回目)をテキストで読んでみた。

(望月)

明らかな論点の違いはイラク問題ぐらい。単独のブッシュと協調のケリーなのだが、どちらも無難にこなしていつまらなかった。「強い影響」と書いたが、たぶん票を左右するほどのことはないだろう。だいたい司会がいるのはいいとして、二人が直接やりあっちゃいけないのは興ざめ。やり込められたくないのは、そりゃそうだろうが、こんなのディベートじゃないってアメリカ国民ならずとも思ったにちがいない。これまでのあまりの影響力の強さに、両陣営から色々注文がついた結果ということらしいけど・・・。

逆にわかりやすかったのは「ひと」。直球のブッシュと変化球のケリー。田舎のブッシュと都会のケリー。泥臭いブッシュと洗練されたケリー。基本的なスタイルが随分違う。

司会:「お二人とも奥さんと二人の娘さんという very strong women に囲まれていますよね。彼女たちから学んだもっとも大事なことは何ですか」

もちろん二人とも自分の妻をベタ褒めするわけだが、コメントの終わり方に注目。先攻の大統領は奥様の内助の功ぶりを褒め称えた締めくくりに、二人の馴れ初めまで披露した。

It was the classic backyard barbecue. O'Neil said, "Come on over, I think you'll find somebody who might interest you." So I said all right, bopped over there. Not only did she interest me, I guess you could say it was love at first sight.

よくある裏庭でのバーベキューだったんだ。オニールが「来いよ、すてきな娘がいるぞ」って。それでいいよって行ってみたんだ。気に入ったところか、たぶんこう言っただけで、一目ぼれさ。

で、奥さんは万事控えめという戦略。アメリカ人は家族が大事なのはハリウッド映画で勉強したけど、こういうのは日本の政治家が似たような舞台で言うとはあまり思えない。そのうち言うようになるのかな。

一方の上院議員は、有名な金持ちおしゃべり行動派女房とは再婚であることもあってかあまり彼女には触れず、そこは敵が触れなかった母親の話なども織り交ぜてアピール。そして最後に、

I'm blessed, as I think the president is blessed. As I said last time, I've watched him with the first lady, who I admire a great deal and his daughters. He's a great father. And I think we're both very lucky.

私は幸せ者だ、大統領が幸せ者であるように。前回も言ったように、彼とファーストレディを私はずっと見てきたが、彼女もそして娘さんたちもまったく称賛に値する人物だよ。彼は偉大

な父親だね。そうだね、私たちは二人とも本当に幸運だと思うよ。

取って付けたような。挑戦者が慎重にならざるを得ないのもわかるが、やっぱり白々しい。なんだか日本の政治家も言いそうだ。

攻守は話題ごとに変わる趣向だったが、大統領からは議員のようなお世辞じみた発言は一切なし。現職の余裕が攻撃あるのみで、何度も敵の過去の上院における投票行動を「節操がない」と執拗にあげつらった。コドモだなあ。

でもケリーは冷静。極めて論理的であって褒めてみたり貶してみたり。オトナだなあ。

次は、多くの日本人にはちょっとわかりにくいと思われる religion (宗教)と faith(信仰)についてのコメント。

キリスト教でもユダヤ教でもイスラム教でも信仰の自由は保証されるべき、と言うところまでは同じ。信仰を大事にしているというのも共通するのだが、熱の入れようには明らかな差が。

周知の事実ながら、どっぶり信じてるんだなあ、というのが大統領。キリスト教、プロテスタントの一派を熱烈に信仰する彼は、

Religion is an important part. I never want to impose my religion on anybody else. But when I make decisions, I stand on principle. And principles are derived from who I am. (中略) I believe that God wants everybody to be free. That's what I believe. And that's one part of my foreign policy.

宗教は重要な部分なんです。私は私の宗教を他の誰かに押し付けたいとは決して思いません。しかし決定を下すとき、私は原理に依って立っています。そしてその原理は私という存在に由来するのです。(中略)神は全ての人の自由を望んでいると私は信じています。それこそが私の信じていることなのです。そしてそれが私の外交政策のある部分を占めているのです。

自分の religion は押し付けたくないが、God は押し付けているように聞こえる。なぜならGod は一人しかいないんだから選択の余地無し、だからなんだろう。証拠に my religion とは言っても my God とは言わない。キリスト教の原理である。そしてさらにこう続く。

In Afghanistan I believe that the freedom there is a gift from the Almighty.

アフガニスタンにおいて、私はあそこの自由は全能(の神)からの贈り物だと信じています。

でも、神が一人きりなのかどうか以前に、いるのかいないのかすら全然判らない身にしてみれば、his God であり his Almighty としか聞こえないのである。

対するカソリック信者でありながら中絶賛成派の票をも取り込みたいケリーは押さえ気味。例によって細かい気配りで、

(最終面へ続く)

(七面から続く)

Native Americans who gave me a blessing the other day had their own special connectedness to a higher being.

先日私を祝福してくれた先住民の方々には、崇高なる存在との彼らだけの特別な繋がりがありました。

などと先住民にも触れてアピール。自分の信仰よりみんな自由に信じていいという方に重きが置かれていた。個人的にはこっちの方に親近感が湧くのだが、さて、アメリカ国民の好みはどっちだろう。



bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、バーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

手下、和国の首相。(一面から続く)
領の手下であるというのが驚きだ。いや、そんな話がしたいのではない。どちらも二世議員なのは偶然の産物か、それとも、歪んだ想像能力は遺伝するということなのか。あるいは、議員の息子という特殊環境が常識というものをも彼らの脳みそからすっかり消し去ってしまったのだろうか。いやいや、こんな話があったいでもない。折角の想像力も使い方を間違えるとんでもないことになりまよ、と。これが私の言いたいことである。

度重なる台風や地震で、多くの生命が失われ、今もなお、苦しむ数多の人々がいる。色男、金と力はなかりけり。いやいや、色男なんぞではないにもかかわらず、金も力もない私。できることといえば、ドラえもん募金なる、妙な名称のものを通じて微々たる微々たる微々たる金額を差し出すのが精一杯のところ。言葉がない。言葉がない。

台風で何百人もの人が亡くなられた。地震で何十人もが亡くなられた。心からお悔やみ申し上げる次第である。天災の如何に恐ろしいことか。いくら文明が進歩したといっても人間の力など大自然の前では何程のものでもないと感じる。

「生命は地球より重い」という言葉、福田赳夫が引用したことで有名だが、元は最高裁の判決文だったのだろうか。善くも悪くも、美しい物言いはある。しかしながら、これ

はレトリカルな表現に過ぎぬことは歴然だ。ために、プッシュや小泉に尋ねてみるという「と即答するだろう。去り際にコロンボばりに振り向いて、そうそう、俺さまの命は別だがね」などと決め台詞を残したりしたら最高だが、彼らにそれほどのウィットはあるまい。ああ、私の想像力も彼らに劣らず暴走気味なようである。

大自然の前では非力な私たち、天災は防ぎようがない。それに対して、人災とは、本来、避けられるはずのもの。イラクでは既に十万人以上が亡くなっているという。こんな話をしていたら、知人が言う、プッシュが兵役逃れをしたベトナムじゃあ二百万人以上が死んでるんだぜ、と。うづむ。

繰り返そう、人災とは、本来、避けられるはずのものである。(全大)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail : geta@geta-s.com
創建一級建築士事務所

編集後記
からす新聞第六巻第一〇号(通巻第七〇号)は無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇四年十一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾
ゲタS
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

ゲタS